



「日本一の応援」ナイン後押し

ソフトボールが盛んな群馬県には現在、実業団チームが3つある。日本リーグ女子部のルネサスエレクトロニクス高崎（高崎市）、太陽誘電（同）、ペヤング（伊勢崎市）だ。5月31日と6月1日に伊勢崎市野球場で行われたリーグ戦に足を運んだ。

古巣のルネサスは、シオング製薬（兵庫県）と対戦して2-0で快勝。エースの上野由岐子が5者連続三振を奪うなど好投し、駆けつけた地元ファンを沸かせた。2008年北京五輪の金メダル獲得の原動力となった上野は、今も世界トップクラスの投手。迫力ある投球を間近で観戦できるのも、日本リーグの醍醐味だと思う。

スタンドには、ルネサスの社員や家族、地域のみなさんが勢ぞろい。応援の横断幕を

ソフトボール元日本代表監督、NPO法人「ソフトボール・ドリーム」理事長

宇津木 妙子

* 毎週日曜日掲載



多くの応援団が駆けつける古巣・ルネサスエレクトロニクス高崎のリーグ戦（5月31日、伊勢崎市野球場で）



ずらりと並べ、強い日差しが照りつける中、絶えず大声援を送っていた。本当に頭の下がる思い。心温まる光景は、約30年前から続く高崎の「風物詩」でもある。

私が、ルネサスの前身・日立高崎の監督に就任したのは1986年。3部リーグ所属のチームは発展途上で、勝つこともあれば、思わぬ大敗を喫することもあった。そんな時、私を、ナインを後押しし

てくれたのが応援団だった。

全国大会（総合選手権大会）に出場した時などは、大型バス3〜4台に分乗して従業員みんなで駆けつけてくれた。点が入れば、球場が割れんばかりのドンチャン騒ぎ。逆に、審判が微妙な判定をしようものなら「ミスジャッジだ！」と遠慮のないヤジが飛ぶ。苦しい時こそ、一体となって声を枯らしてくれた。あの「日本一の応援」があったからこそ、高崎は、1部リーグで常に優勝争いをする強豪チームに成長できたと思う。

読者のみなさんは、企業がスポーツチームを持つ理由をどう考えるだろう。私は「ひたむきにプレーする姿を見てもらい、従業員の心を一にするため」だと思う。どんな時も手を抜かず、懸命にボールを追うチームだから「応援

しよう。共に戦おう」と思ってもらえる。

だから、よく選手たちにはこう呼びかけた。「強くて、誰からも愛されるチームを目指そう。企業スポーツは、従業員みんな、そして、地域から応援されて成り立っているんだよ」——と。我ながら、難しい注文をしていたものだと思う。けれど、現在チームを率いる宇津木麗華監督もそのことをよく理解し、選手たちも高い意識を持ってプレーしてくれている。伝統を脈々と受け継いでくれていることが何よりうれしい。

長引く不況もあって、企業スポーツを巡る環境は厳しくなるばかりだ。それでも、選手は「会社のため、地域のために頑張ろう」と使命感を持って戦っている。球場を包み込む拍手やエールは、そんな彼女たちにとって何より励みになるはず。どうかこれからも、温かい声援と拍手をよろしくお願いします。